

9月7日(金) シンポジウム第1室(3号館302)

## 文学作品についての言語学的文体論の可能性について

神奈川大学 古岩井嘉蓉子

文体(style)について明確な定義を与えるのは難しいが、多くの人々は文体という問題を文学作品研究の方法の一つとして、又日常の言語生活、例えば特定のグループの文体、特定の時代や社会階層の文体という面から取り上げている。文体は捕え所のない概念であるが由に、種々に解釈することができる。特に小説の場合、文体は重要な構成要素であり作品の良否は、絵画が線、色によって決まるように、文体、文章は、その作品の生死を制する程、重要な意義がある。そして思想・内容はそれに適しい言葉と表現方法によって読者に伝えなければ充分伝達されない恐れがある。新しい独創性に満ちた内容・思想は常に新鮮な文体の皮袋に入れられなければならない。

それでは、文学作品の生命である文章、文体の研究方法はどうしたらよいのであろうか？まず文体について簡単に二つの見解を挙げる。一つは、作品の言語的特徴と文法上の規範(norm)との間のずれ(departure)、もしくは、何ら表現上の特性のない無標の規範的な表出されたものに付加(addition)された言語的特徴をその作品の文体と考えるもの。もう一つは、作品の文脈、そして場面等の状況の中で、その特徴を見分ける。この分析では実際には特定の言語単位と、その使われる環境、状況との間の関係を記述することである。筆者は、ここでは第一項の立場をとる。

そこで文体分析を進めるに当って、作品、書き手、読み手の三つの間の対応関係の焦点を、どこに当てるかという問題がある。第一は、ある作品の言語特徴を取り出して言語学的に整理を試みるのを目標とするのか、第二には、その作品に見られる固有の際だった特徴を選び出して、その作家の研究の手懸りとするのか、第三には、同一作家の他の作品の言語特徴と比較してその作品について論ずるかといった具合に的が絞られる。ここでは、第一の点を中心に考察をすすめる。

ある作品の文体研究のために、まずある作品の言語特徴を取り出して言語学的に整理を試みる。この方法は一般にLinguistic Stylistics (Stylolinguistics)と呼ばれるが、これは客観的な方法による言語体系の枠組をもって記述することによって文体研究の糸口を求めるから分析者の印象や直観や作者への言及といったものは避けた科学的なやり方である。作品を実際に客観的にそして詳細に観察し分析するのは優れた作家を理解するのに、ある程度は役に立つと思われるが、はたしてその客観的方法によって、正確な文体特徴を抽出できるかどうかは、科学が時々神話的な答えしか出してくれない現実似ている。

しかし、あえて言語学的枠組をもって作品における文体上有意義な言語特徴を検出し、補足的に何故そのような表現が用いられているのかをE. ヘミングウェイの『老人と海』の分析結果を例にとって説明したい。更に、文体分析の考えを文学作品のテキストの枠から広げて語りの構造にまで応用してみる。